

禁忌からみる世代間コミュニケーションの意義と今後の展望

— Significance and future prospects of the
multi-generation's intergenerational communication
from the that views from of contraindicationed and
future prospects —

3年18組27番 馬籠勇人

3年21組 8番 宇田川真由

3年21組25番 巴太熙

3年22組20番 関田真由

3年26組37番 森野修平

禁忌からみる世代間コミュニケーションの意義と今後の展望

— Significance and future prospects of the multi-generation's intergenerational communication from the that views from of contraindicationed and future prospects —

1 禁忌からみる世代間コミュニケーションの意義と今後の展望

2 Significance and future prospects of the multi-generation's intergenerational communication from the that views from of contraindicationed and future prospects

3 キーワード：禁忌 恐怖 語り手 高齢者 世代間

4. 論文要旨

ジュミレイ・ベンサムは「恐怖とは、身の危険を感じ、その場から一刻も早く逃げ出したいと思う不快な感情である。そして、苦痛を避け、快楽を求めるということが、人間の究極的な行動原理である。」¹と述べている。しかし、本当にそうであろうか。現代の人々はホラー映画やお化け屋敷²、あるいはバンジージャンプ³や類似のアトラクションなど、自ら恐怖を求める傾向にある。それは、今という時代が平和であるために、生きていく上で切っても切り離せない恐怖という感情を体験する機会が減ってきているからではないだろうか。

もちろん、恐怖とは危険性を孕んでいる。よって古くからそれは「してはいけない」という「禁忌」⁴として伝承されてきた。この場合、それは宗教的・社会文化的・風俗的禁忌として多くは存在していたが、現代日本のような宗教的背景の薄い社会では地域共同体や家族関係から多くが伝えられることになる。

¹ 19世紀のイギリスの哲学者・経済学者・法学者。功利主義の創始者として有名である。

Jeremy Bentham, *The Theory of Legislation*, ed. C.K. Ogden, 1931 pp.32-pp.47

² お化けの出そうな状況を作り出して客に恐怖心を煽るために作られた娯楽施設。

³ 高層ビルや端の上などといった高い場所から命綱一本で飛び降りるアトラクション。

⁴ 日時・方位・行為・言葉について、さわりあるもの、忌むべきものとして禁ずること。
新村出『広辞苑 第六版』岩波新書, 2008年

核家族化⁵あるいは単身家族化⁶が進行し、三世代同居の家庭が減少しているいま、この伝承機能が不全状態にあると考えることができよう。

そこで我々はアンケートを用いて現代の人々が恐怖を求める傾向にあることと、現代で禁忌が薄れつつあるという仮説を検証し、この二つの側面から、今後の展望について触れる。

⁵ 核家族とは具体的に①夫婦とその未婚の子供②夫婦のみ③父親または母親とその未婚の子供のいずれかからなる家族を指す。日本では核家族世帯が60%を占める。

⁶ 一人暮らしであること。未婚のは丘、別居・離婚・士別・子の独立などにより単身で暮らす人のこと。

【目次】

論文要旨

第一章 「禁忌」について

第一節 禁忌とは

第二節 日本人の心理的習性

第三節 禁忌の伝承

第二章 恐怖について

第一節 恐怖の歴史

第二節 現代における恐怖

第三章

第一節 恐怖の説得メッセージ

第二節 恐怖回避と恐怖受容

第四章 アンケート調査

第五章 結論

第一章 「禁忌」について

第一節 「禁忌」とは

まず、恐怖について論じる前に身を守るために不可欠な存在であり、あらゆるリスクを回避する禁忌について論じる。

禁忌の種類として第一に、人の物を盗む、人を殺すことなど基本的な人権に関わる侵害行為や犯罪が挙げられる。人間社会では古代以来その行為に対しては刑罰を与えてきた。罪を犯した者は社会から隔離され、排除された。第二に嘘をつく、親を大切にしないことなど倫理的な問題に抵触する側面が挙げられる。これは犯罪ではないが、「嘘つきは泥棒のはじまり」⁷ともいうように、非常に嫌悪される行為である。それは人の道、つまり道徳に違反する行為とされた。第三にマナーなどに代表される一般的な身だしなみ、振る舞いの基準が挙げられる。これはマナー違反や不謹慎で礼儀を守らない行為であるとされ、一人前の人間が行うことではないとされている。第四に小乗仏教の出家者が、肉食妻帯⁸する、キリスト教カトリックの僧が異性と交わることなど宗派の諸戒律が挙げられる。これは宗教者にとっての戒律破り、破戒である。その宗教の信者以外にとっては何も問題のないことであるが、それぞれの宗教にとっては大切な事柄である。⁹

本論文の禁忌とは以上の「犯罪」、「道徳」、「礼儀」、「戒律」の四つの事柄でいえば、第三のマナーを守るための諸ルールを中心に議論を展開していきたい。たとえば、その一例として「夜に口笛を吹いてはいけない」がある。なぜ、夜に口笛を吹いてはいけないのだろうか。この禁忌についてはその理由を答えられる人も多いに違いない。「蛇がでてくるから」である。地方によっては、鬼が出る、泥棒に入られるなどと諸説あるが、とにかく人間にとって心地よくない

⁷ 平気でうそをつくようになると、盗みも平気でするようになる。嘘をつくのは悪の道へ入る第一歩であるということ。

⁸ 禁欲生活を送るべき僧が魚肉を食べ、妻を持つこと。

⁹ 新谷尚紀『日本人の禁忌』青春出版社,2003年12月 pp3.-pp.4

ものが出現するとされている。しかしよく考えてみると、実際に夜に口笛を吹くことと蛇の出現の因果関係は全くない。ここに禁忌が人の心に作用する力を見て取れる。夜に口笛を吹くことが他人への迷惑となるという戒めであるこの伝承に、蛇という「避けたいもの」が表現されている。これは人が「恐がる」「嫌がる」感情を用いることにより、禁忌の抑止力が強化されている。よって、鬼でも泥棒でもその効果を発揮する。¹⁰

第二節 日本人の心理的習性

人間の心理には、迷信を信じて言われのない不安をコントロールする作用が働く。自分でもなぜそうしたいのか分からないまま、「人がそういうからそれをしてないと不安にかられ、何もしないよりした方が安心する。」という極めて不合理なこの現象は、「心理」の一つである。この非合理性を日本語に置き換えると、「縁起担ぎ」¹¹と表現する。日本では、死と苦の語呂合わせから「四」や「九」の数字を使用しない、病氣見舞いには「根付く」や「寝つく」といった語呂合わせから植木や花の鉢物は避けるなど、「縁起が悪い」という理由で日常的に避けられる事柄は多い。よって、病院、アパート、ホテルなどでは四号室、九号室を作らない。逆に「八」は末広がりで「縁起がいい」とされる。かつての結婚式や祝い事の席に和の膳が供され、必ず鯛が並ぶのは鯛が「めでたい」に繋がるからである。また、長寿の祝いの席に「千年生きる鶴」や「万年生きる亀」を模した鶴亀の飾りが添えられるのも長寿にあやかる意味合いが関係している。

こうした言葉の類似性、特性、性質に願いを託そうとする行為をジェームズ・

¹⁰ 新谷尚紀『日本人の禁忌』青春出版社,2003年12月 pp.152・pp.154

¹¹ ある物事に対して、以前良い結果が出た行為を繰り返し行うことで吉兆をおしはかること。また、よい前兆であるとか悪い前兆であるとかを気にすること。

フレイザー¹²は「共感呪術」と呼ぶ。それには「類感呪術」と「感染呪術」の二つがある。前者は似ている音の言葉同士が互いに感応し合って結果をもたらす。「鯛とめでたい」の例は類感呪術である。後者は接触や感染によって同化する。大相撲で花道を引き上げる勝ち力士の体に触れるのは感染呪術である。

こうした縁起担ぎは古典的な「言霊信仰」¹³に通じる。つまり、言葉や数字はたんなる符号ではなく、日本人は良い言葉は吉事に、悪い言葉は凶事に繋がると考える習性がある。¹⁴

第三節 禁忌の伝承

禁忌の伝承には「何々すると、何々になる」、あるいは「昔、何々ということがあったから、何々してはいけない」の形式が成立している。これが民間伝承¹⁵の禁忌の定型である。禁忌とは人を心配する思いやりの気持ちを含み、親が子へ、祖父母が孫へとといったように代々風習、習慣として伝承されてきた民族学¹⁶の一環である。この学問は柳田國男¹⁷が基礎をつくった。膨大な時間の堆積を突き抜けて禁忌が生きつづけているのは、神話を含めた歴史的事実や真実感があるからである。言い換えれば、生きつづけることによって真実感が厚みを増したのである。その反面、消えてきている禁忌も存在する。その一つに「夜に爪を切ってはいけない」禁忌がある。これは夜に爪を切ると親の死に目に会えなくなるとされ、照明が発達していない時代に、暗い中で爪を切ることは怪我をする危険性があると戒めた。しかし、照明が普及し朝昼は多忙な仕事のスケ

¹² 19世紀のイギリスの社会人類学者。原始宗教や儀礼・神話・習慣などを比較研究した。

¹³ 言語そのものに霊力が宿っているという信仰。

¹⁴ 新谷尚紀『日本人の禁忌』青春出版社、2003年12月 pp.28・pp.30, pp.150・pp.151

¹⁵ 民衆の日常生活の中で古くから受け継がれてきた知識・技術・習俗など。

¹⁶ 伝承されてきた風習、習慣、習俗など、古くからある文化を明らかにしようとする学問。

¹⁷ 「日本人とはなにか」その答えを求め、日本列島各地や当時の日本領の外地を調査した。日本民俗学の開拓者である。

ジュールに追われる現代人にとって、爪を切る時間は夜しかない。よって今の時代ではこの禁忌は消えつつある。禁忌の中には、時代とともに有名無実化していく例がある。「夜に爪を切ってはいけない」という例はもっとも顕著であろう。生活様式が変わり、社会が変動する中で禁忌概念の本質は流動している。これからも禁忌は文化や文明の発展と変化とともに増減していくであろう。

禁忌の伝承は日本人の民族性を知る上で決しておろそかにしてはならないことである。現代人の多くはおそらく夜に爪を切ることがなぜ悪いかわからないであろう。この根源を探っていくことによって、我々の先祖がなにをどのように考えていたのかの手がかりをつかむことができる。「そんなものは迷信にすぎない」といって片付けてしまったのでは日本人の民族性を正しく捉えることはできないであろう。一見、迷信に思われてもその深淵を探ると日本人の類い稀な知恵を知ることができる。¹⁸

では、なぜ犯せば社会から排除される危険性を含み、してはいけないといわれる「禁忌」を人間は犯してしまいたくなるのであろうか。それは人間という存在が安定した社会を構築しその成員として完全であらうとする心理のベクトルを持つ存在でありながら、同時に逸脱してみようとする心理のベクトルをもつ同時矛盾の存在だからであろう。

第二章 恐怖について

第一節 恐怖の歴史

現代の恐怖を求めようとする傾向を探る前に、恐怖についての歴史を振り返る。昔は身近に恐怖を感じる機会が多々あった。何故なら現代の平和な社会とは違

¹⁸ 樋口清之『禁忌と日本人』講談社、1982年12月 pp.12~pp.14

い、昔は功名や統制のために戦が絶えず起こり、多くの人々が戦死した。また現代のように医療が発達していなかったため病によっても多くの死者が出た。院政期から鎌倉時代¹⁹にかけては死者を土葬²⁰や火葬²¹にせず道端に放置する葬法が普通に行われた。平安京の路傍に死体が転がっている光景は至極当然であったのである。皇族や貴族は当時から立派な葬儀が行われ土葬や火葬された。この放置は主に貧しい階層で行われたのである。²²転がっている死体は埋葬されず放置されれば腐敗してしまう。現代人にとって、死体の腐敗過程を見ることはないであろう。目の当たりにしなくとも、強い不快感に襲われるに違いない。昔の人々は身近に「死」の恐怖を感じ怯えていた。

死体を放っておく状況を改善するため、中世中期²³、埋葬の場所を寺院内に設置するなど、仏教寺院の葬送ビジネスが開始された。この寺院の埋葬場所は共同墓地として成長し、死者はその共同墓地に送り込まれた。²⁴それによって死体の転がるおぞましい光景を見る機会は減っていったのである。また、法律でも死体の遺棄を禁じ、社会から殺し殺されるといった「死」は管理されていった。すると、その代替として「怪談」²⁵などのフィクションが語り継がれるようになる。養老孟司²⁶はこのフィクションに含まれる「死」をイマジネーションとしての「死」とし、「死」が本気でなくなってきたと述べている。²⁷怪談は人々の怪奇な恐怖体験が伝承され、エンターテインメントの恐怖として人々を楽しませた。よって人々は昔から恐怖を求めていたといえる。怪談は欧米のスピリチュアリズムの影響を受け 20 世紀初めに再度ブームを起こす。夏目漱石²⁸の『夢十夜』²⁹や森鴎外³⁰の『百物語』³¹はこの潮流の中で生まれた。柳田

¹⁹ 11 世紀後半から 12 世紀末の期間。

²⁰ 死体をそのまま埋葬すること。

²¹ 遺体を焼却すること。

²² 勝田至『死者たちの中世』吉川弘文館,2003 年 5 月 pp.21・pp.36

²³ 12 世紀後半。

²⁴ 勝田至『日本葬制史』吉川弘文館,2012 年 7 月 pp.133・pp.142

²⁵ 怖さや怪しさを感じさせる物語の総称。日本古来のものを限定して呼ぶ場合もある。

²⁶ 解剖学者。東京大学名誉教授。解剖学を専門とする。

²⁷ 養老孟司『死の壁』新潮社,2004 年 4 月 pp.42・pp.48 pp.52・pp.54

²⁸ 19 世紀の日本の小説家、評論家、英文学者。

國男の代表作『遠野物語』³²も同様である。この当時は日露戦争後³³であり、自分たちの身近な死者が登場する近代日本人のためのリアリティのある怪談が好評であった。³⁴

第二節 現代における恐怖

では、現代における恐怖とは何か。現代の日本周辺では第二次世界大戦後は戦が起こることもなく、医療も発達した。現代はとても平和な社会が構築されている。しかし人間は先述の通り、統制された平和な社会だからこそ薄れている恐怖に触れ、そして自ら恐怖を求め、犯す傾向にある。エンターテインメントではあるが、お化け屋敷やバンジージャンプなどはまさにその例である。これらのエンターテインメントは人々に「スリル」という、怪談よりも「リアリティ」のある疑似恐怖を体験できるサービスとして存在している。³⁵

その一方でベンサムが述べるように、人間は恐怖を避ける生き物である。よって人は恐怖を喚起されその対象が孕んでいる恐怖を認知すると、その恐怖対象を避ける行動をとることもあるのである。つまり、恐怖を喚起することにより人間にとって恐怖を感じるような危険な行動に規制をかけることができる。そこで、まず恐怖は人に説得メッセージ³⁶を与えられるのかを考え、次にその説得メッセージはどのようなプロセスを経て自分の態度を変えるのか。また、説

²⁹ 1908年7月25日から8月5日まで『朝日新聞』で連載された小説。明治時代を始め、神代・鎌倉・100年後と、10の不思議な夢の世界を綴る。

³⁰ 19世紀の日本の小説家、評論家、翻訳家、陸軍軍医。

³¹ 1911年10月から『中央公論』で掲載された短編小説。

³² 1910年に発表した説話集。日本民俗学の黎明を告げた名著。

³³ 1904年2月から翌年にかけて、満州・朝鮮の支配をめぐって戦われた日本とロシアの戦争。1905年9月のポーツマス条約締結によって終戦を迎える。

³⁴ 中尾文隆『柳田国男の民俗学がわかる本』秀和システム,2007年3月 pp.52-pp.69

³⁵ 五味弘文『お化け屋敷になぜ人は並ぶのか』角川書店,2012年6月 pp.46-pp.52

³⁶ ある問題に対する受け手の態度を変えさせるメッセージのこと。

得メッセージの受け手はどのような行動をとるのか考えていく。

第三章

第一節 恐怖の説得メッセージ

まず、恐怖を人に喚起することでその恐怖の受け手に対して説得メッセージを与えるのか考える。現代社会で健康や交通安全、労働安全に関する行動を推奨するように、受け手に恐怖感情を起こさせ説得する方法がある。受け手に禁煙を勧めるために煙草のパッケージにニコチンで真っ黒になった肺の写真を載せる、制限速度内での車の運転を促すために速度超過により起きた交通事故の悲惨な現場写真を見せる。これらにより受け手に恐怖感情を起こさせる。深田博己氏³⁷によると、この恐怖は喚起されればされるほど説得効果が大きいことを指摘しており、また問題を解決するための対処方法を実行できると受け手が捉えている限りは、弱い恐怖（脅威）を喚起する説得メッセージよりも強い恐怖（脅威）を喚起する方が効果的であると指摘している。この関係は、受け手の年齢やパーソナリティ、文化に関係なく認められているとも述べている。また、パーロフ³⁸によると、(a) 与え手は受け手を怖がらせることが必要であり、(b) 与え手は取り上げた問題点とともに、その解決方法についても述べる必要があり、(c) 対処法の効果性を述べる際には、その対処法を実行しない場合に受け手が被るコストとそれを実行することによって得られる利益を強調し、そして、(d) 恐怖（脅威）やその対処法を受け手と関連づけて、（受け手の欲求や価値観を考慮して）提示すべきである。とされ、この4つが当てはまるとき、恐怖を人に喚起することで、その恐怖の受け手に対して説得メッセージを与え

³⁷ 深田博己「恐怖情報と説得」北大路書房、2002年 pp.278・pp.329

³⁸ Perloff, R.M. (2003). *The dynamics of persuasion: Communication and attitudes in the 21st century*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.

る実用的な結論を述べている。ただし、こうした方法は、なかなか止めることのできない、社会的に望ましくない受け手の行動を変容させる場合に適用できるとされている。これらのことを考慮して考えると恐怖を喚起することで、その恐怖の受け手に対して説得メッセージを与えることは禁忌にも当てはまる。

次に、恐怖を喚起され説得メッセージを受け取った受け手は、どのようなプロセスを経て自分の態度を変えるのか考える。それには、説得メッセージを受け取って、それを理解し、関連する情報を思い出し、メッセージに同意するかどうかを判断し、同意した場合にはそれに基づいた行動をとるという種々の段階が考えられる。これらの段階のモデルとして、チェイキン³⁹のヒューリスティック・システムティック情報処理³⁹(heuristics versus systematic information processes)を用いて考えてみる。まず、このモデルの態度の変容プロセスは二種類あると想定されており、その一つはシステムティック処理である。システムティック処理とは、判断を下すためにたくさんの情報を集めて精査するような包括的で分析的なプロセスである。その分、そうした処理をするだけの能力が受け手に要求され、情報処理プロセスは状況や受け手の個人差の影響を受ける。また、受け手の説得テーマに関する事前の知識が豊富であれば、処理が促進する。一方、ヒューリスティック⁴⁰処理は、限定された情報処理プロセスで

³⁹ ヒューリスティックを利用した自動的な情報処理過程と、認知資源を使用して論理的に情報処理が行われるシステムティック処理の、二重過程で説得をとらえようとする理論を、ヒューリスティック・システムティックモデルと呼ぶ。まず、ヒューリスティック処理により、説得内容の真偽の判断が行われるが、ここで確信が得られない場合や、認知資源を使用して情報を吟味できる状況では、システムティック処理により精査が行われる。

⁴⁰ 問題を解決する際、簡略化された推論、判断方法を用いて結論に達する方法をヒューリスティックと呼ぶ。人間が意思決定をする際、全ての情報を用いて十分に吟味し、正確さを目指すのではなく、限られた情報の中で判断が行われることが多い。これは必ずしも最適な結論に達するわけではないが、経験によって判断されるため、結論に至る時間

あり、少ない情報しか処理されない。これは、各人の経験に基づいて形成され、判断を下す際のコスト（労力や時間）を低減するのに役立つ。しかし、あくまでも簡便な判断方法なので、場合によっては間違った判断を下してしまうというリスク（危険性）も伴う。⁴¹このことを考慮した上で、実際に恐怖を喚起された説得メッセージの受け手はどのように行動するのかを考える。

第二節 恐怖回避と恐怖受容

まず、説得メッセージの受け手の行動パターンを大きく二つに分類する。一つは、恐怖を回避し行動するパターンである。これは、恐怖とは現実もしくは想像上の危険、喜ばしくないリスクに対する強い生物学的な感覚であること、序章でも述べたように、「恐怖とは、身の危険を感じ、その場から一刻も早く逃げ出したいと思う不快な感情である。そして、苦痛を避け、快楽を求めるということが、人間の究極的な行動原理である」というジュミレイ・ベンサムの考えに基づいて考えると、人間は恐怖を避ける生き物である。また、先述したチェイキン⁴²のヒューリスティック・システマティック情報処理⁴²（heuristics versus systematic information processes）を用いて考えてみる。ヒューリスティック・システマティック情報処理の態度変容プロセスの一つ目であるシス

が短いというメリットがある。しかし人によってある一定の偏りが生じてしまうことが多い。

⁴¹ 今井芳昭『依頼と説得の心理学』サイエンス社,2006年9月 pp.189-pp.196

⁴² ヒューリスティックを利用した自動的な情報処理過程と、認知資源を使用して論理的に情報処理が行われるシステマティック処理の、二重過程で説得をとらえようとする理論を、ヒューリスティック・システマティックモデルと呼ぶ。まず、ヒューリスティック処理により、説得内容の真偽の判断が行われるが、ここで確信が得られない場合や、認知資源を使用して情報を吟味できる状況では、システマティック処理により精査が行われる。

テーマティック処理は受け手の説得テーマに関する事前の知識が豊富であれば、処理が促進し、二つ目のヒューリスティック処理は各人の経験に基づいて形成される。このことを考慮して考えると、ある物事が恐怖を孕んでいるという事前の豊富な知識、ある物事が恐怖を孕んでいるという各人の経験的認知が必要といえる。つまり、もしある物事が知識や経験として恐怖を孕んでいることを知らなければ、その恐怖を避けるプロセスには至らないのである。

もう一つは、恐怖を受容する行動をとるパターンである。人間は生物学的観点から考えると不合理であるが怖いもの見たさから純粹に恐怖を体験したがる。むしろこちらの方が実際の危険を伴わないだけに安直に体験でき、嗜好者の数も多い。現代社会において、ホラー映画・お化け屋敷などを好む現象である。この現象が我々に教えることは、現実の危険がなければ、恐怖感情（逃げ出したいという気持ち）は必ずしも不快ではなく、むしろ我々は率先して恐怖を経験しようとする。さらに、その体験は恐怖を克服するものではなく、純粹な娯楽としてである。では、この純粹な娯楽は通常の忌避される恐怖とはどこが違うのだろうか。それは、恐怖の内容が異なっており、対象としての意味内容での違いは必要ない。明白な違いは、我が身に危険が及ぶかどうかである。危険が及ばない恐怖とは、恐怖場面に直面してはいるが、自分は安全な観察者であり、その恐怖対象は本質的に自己には向かってこない場合である。⁴³一方で、人間は対抗恐怖⁴⁴ (counterphobic) という恐怖を感じる対象に自ら進んで直面することで、恐怖を乗り越えようとする心理をもっているためこのような恐怖を受容する行動をとるとも考えられている。

第四章 現代の世代間コミュニケーション調査

⁴³ 具志堅伸隆、唐沢かおり「怒りと恐怖がもたらす説得効果」社会心理研究、第22巻第2号 2006年 pp.4・pp.9

⁴⁴ 恐怖を感じる対象に自ら進んで直面することで、恐怖を乗り越えようとする心理のこと。

恐怖を人に換気することでその恐怖の受け手に対して説得メッセージを与えることの一例である禁忌はどのようにして人々は学ぶのだろうか。我々は、禁忌は祖父母といった高齢者から語られる、つまり世代間コミュニケーションにより学ぶのではないかという仮説をたてた。この仮説を立証するためアンケート調査と聞き取り調査を実施した。

またこれと同時に、現代の禁忌の認知度と現代の世代間コミュニケーションの現状も調査した。以下がアンケート調査及び聞き取り調査の実施概要と結果である。

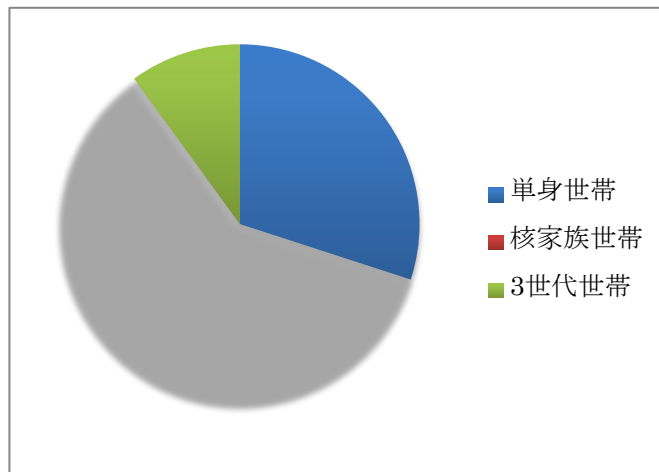
第一節 調査の実施概要

WEB アンケートと聞き取り調査の調査期間は9月2日～9月8日までの7日間、SNSなどを利用して拡散し、実施した。調査対象は、10代～80代の男女。7日間で157人の回答を得ることができ、そのうち84人が男性、73人が女性の回答という結果になった。

第二節 調査内容及び結果

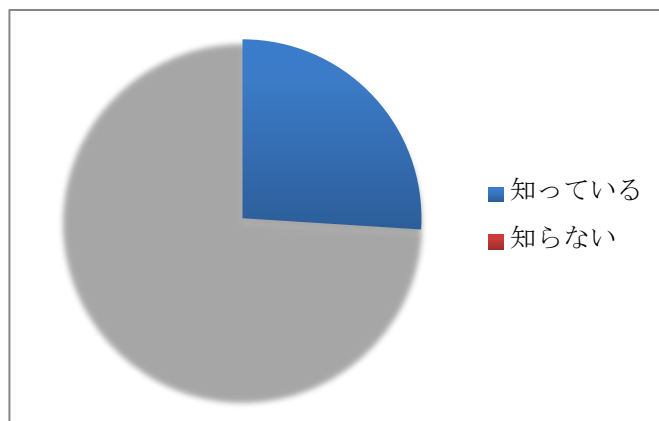
設問1 あなたは家族構成を教えてください。

①単身世帯 ②核家族世帯 ③3世代世帯

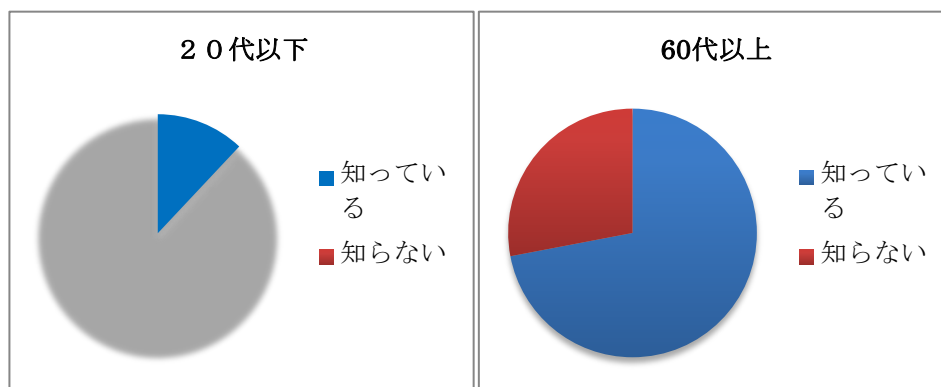


設問2 あなたは「土用波」という言葉を知っていますか？

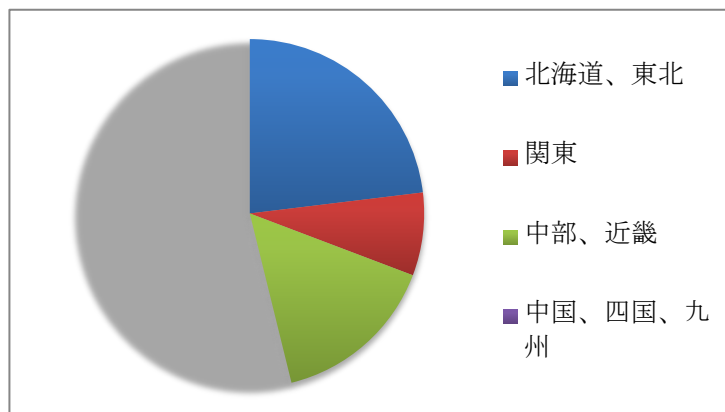
①知っている ②知らない



▼世代別の「土用波」の認知度

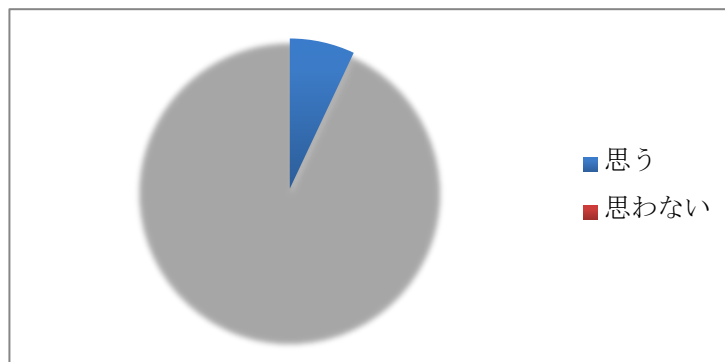


▼20代以下の土用波を知っている人の出身地



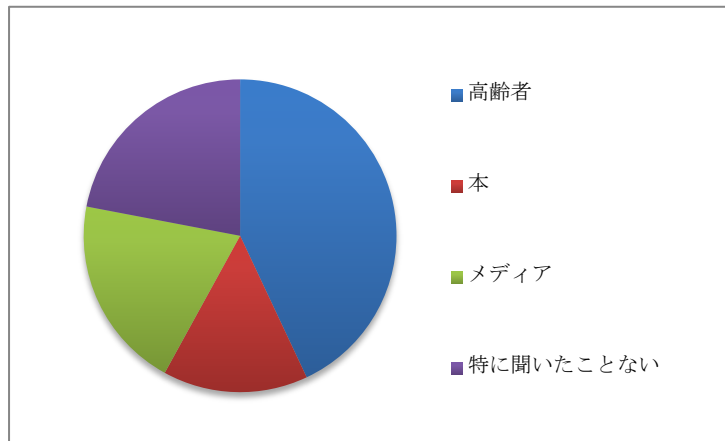
設問3 「土用波」の意味を知ってもお盆過ぎに海に行きたいと思いますか？

①思う ②思わない



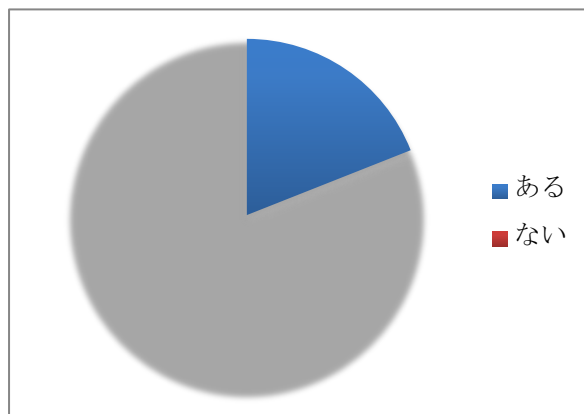
設問4 「禁忌」などをどのようにして知りましたか？

①高齢者 ②メディア ③本 ④特に聞いたことがない



設問5 親族以外の高齢者と関わる機会がありますか？

①ある ②ない



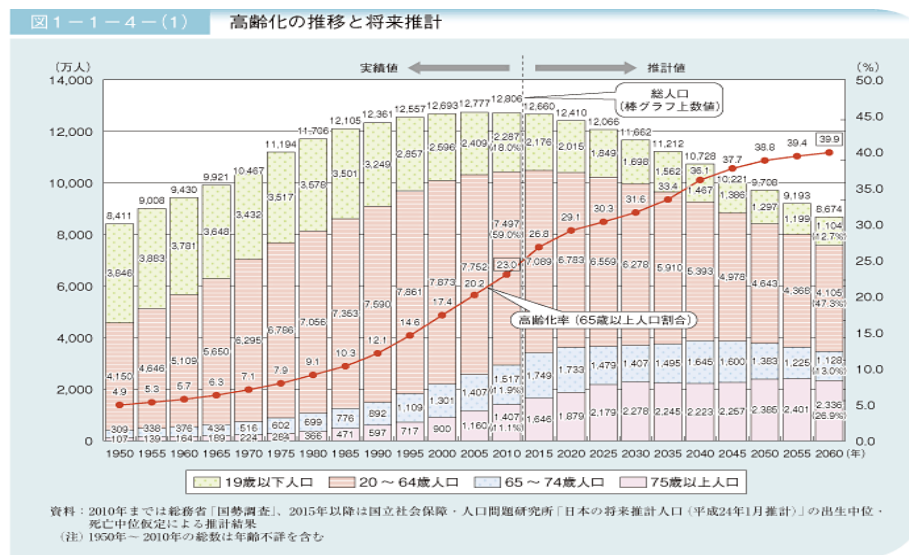
今回のアンケート調査ではこのような結果を得ることが出来た。

まず、設問1の結果をみると、単身世帯と核家族世帯で過半数に及び、やはり核家族化あるいは単身家族化が進行し、三世帯同居の家庭が減少しているということがわかる。また、次に、設問2は三章で述べたように「土用波」についての一般認知度をはかった。年齢が下がれば下がるほど認知度も下がる結果となった。また、20代以下で「土用波」を知っていると答えた人の特徴として地方出身者ということも判明した。これは地方は、敬老会といったような子供と老人とのふれ合いの場が設けられているからではないだろうか。また、設問3において、設問2で「土用波」を知らないと答えた20代以下の人に対し質問し

た結果「行きたいと思わない」と回答した。このことは、「土用波」といったような禁忌を知っていれば危険を回避することが出来るということではないだろうか。設問4は、禁忌をどこで学ぶのかということの調査だが、やはり親族を含めた高齢者というのが半数近くの回答であった。設問5により親族以外の高齢者と関わる機会があると答えた人はおよそ3割で、伝承機能が不全状態にあることが読み取れる。

アンケートを統括すると、やはり単身世帯や核家族世帯が増加することにより、若者と禁忌の語り手である高齢者の交流の場が減少し、禁忌に触れる機会がなくなるため禁忌の存在が薄れる。そのため若い世代は恐怖を回避するよう行動するパターンが減っているのが現状である。世代間の交流の場を増やしていくのが今後の課題である。

図 1



出典：内閣府HPより作成。

(www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/gaiyou/pdf/1s1
 s.pdf)

図 2



出典：厚生労働省 HP より作成。

(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/>)

第六章 結論

以上の観点から、第 3 章での説得メッセージの受け手の行動パターンは、恐怖を回避する行動をとるパターンと恐怖を受容する行動をとるパターンの 2 つが挙げられた。そこで我々は、この 2 つの行動パターンを比較し、現代社会において若者は恐怖を回避する行動パターンが減少しているのではないかと考えた。アンケートから、20 代以下の若者は土用波のことを認知している割合が低い結果を得た。2014 年 9 月 3 日に茨城県神栖市の波崎海水浴場で大学生 2 人が沖に流され行方不明になる事件が起きている。この事件も土用波の禁忌を知っていれば、回避する行動がとれたのではないかと考えた。年齢が上がるにつれて認知度は高いが、現代の若者に禁忌が伝承されていない傾向にある。そこで、高齢者が語り手としての役割を担っていると考察した。近年、内閣府のグラフ（図 1）により高齢者の人口が増加しているのが分かる。また、厚生労働省のグラフ（図 2）とアンケート結果でも分かるように、三世帯世帯が減少し、単身世帯や核家族世帯が増加している。これに伴って語り手として高齢者が重要であるのではないかと考察した。

上記でも分かるように、近年若者と高齢者と日常的に関わっている機会が減少している。昭和の初期において、高齢者が孫や若者に昔語りや禁忌の伝承をしていた。現在は、昔語りや禁忌の伝承の主流は、家庭内よりも講演会といった公の場での語りに完全に移行している。これは、住宅事情の変化やテレビなどの娯楽が増加し、生活環境の変化に伴い近所の人たちが集まらなくなったからである。しかし、高齢者の語りの魅力、知識の量、影響力は大きく、若者にとって高齢者との触れ合いが減少することは良くない。『新潟県の昔話と語り手』⁴⁵では、「現在は、もう昔話伝承の糸がきれかかっている。村や家や小学校の生活のなかで、昔話の語りの場を失ってしまったかに見える。昔話は口で語り、耳で聞くというところが昔話の生命で、そこに人間的なふれあいもある。(略)そういう耳の昔話が、今は目の昔話に変わっていくときでもある。つまり、言葉の昔話が文字の昔話におきかえられていく。しかし、その独自の語りの形式や語り口は消えていく。」⁴⁶と述べられている。高齢者の語りの機会の衰退によって、高齢者の役割が減る。近年の高齢者は、家庭内での地位が低下しており、語りの機会を失うことで地域社会の文化の伝承も途切れる。高齢者が社会参加することで地域社会の連帯感が増すのではないだろうか。高齢者問題に着目している警察庁では、昭和61年に作成された「警察白書」⁴⁷で「豊かな長寿社会を目指して」を副題とし高齢者問題の特集している。「警察白書」では「既存の社会システム全般を長寿社会に対応して再構築していくことが基本的に必要であり(略)豊かな長寿社会を築いていくためには、高齢者の生活の安全を確保しつつ、高齢者がその能力を地域社会において有効に発揮できるよう支援することが必要であり、より一層総合的な施策を展開し、その充実を図っていかねばならない。その際、長寿社会を将来支えることになる少年の健全な育成が

⁴⁵野村純一『新潟県の昔話と語り手』新潟県教育委員会,1979年 pp.14・pp.34

⁴⁶日本における警察活動に対して広く国民の理解を得るために警察庁が作成している白書。

⁴⁷警察庁ホームページ「警察白書」 <http://www.npa.go.jp/hakusyo>

(情報最終確認日：2014年9月17日)

極めて重要な課題であることにかんがみ、長年にわたって培われた高齢者の各種能力を少年の健全育成にも役立てるなど、世代間の交流を促進し、地域社会の連帯意識を醸成する施策を推進することが肝要である」として、高齢者の社会奉仕活動の意義を提起している。高齢者が生きがいを感じる要因は、「社会に貢献している精神的充足感が得られること」「若者との触れ合いや世代を超えて地域の人たちと交流できること」「高齢者同士の関わりを深められること」である。その一例として、長崎の老人クラブが「孫を見守る会」を結成した。毎月会員が警察官とともに街頭に立ち、通学児童に「一声呼び掛け運動」をしたところ、児童のあいさつが良くなった事例が紹介されている。つまり、高齢者との関わりを持つことで良い人格形成に繋がっているのではないだろうか。この他に全国の各地域では老人会もしくは敬老会⁴⁸と呼ばれる地域自治に付随する高齢者への福祉を目的とした相互扶助組織が存在する。老人会の中には子供たちが催し物を行う地域もあり、子供と高齢者が交流を深める機会が設けられている。また、広島の小学校では戦争体験を語る会が行われており、子ども達が高齢者から戦争の悲惨さや平和の尊さを学ぶ機会がある。内閣府 HP (図 3) のグラフによると、これらの高齢者の半数以上が若い世代との交流を希望している。老人会や敬老会で高齢者と子供の世代間コミュニケーションを積極的に設け、高齢者の持つ素朴な知恵や地域にまつわる伝承、禁忌を語ってもらうことで良い人格形成に繋がると考察する。また、地域の伝統や伝承を子どもたちに受け継ぐことができ、世代と世代を繋げる意味で相互に価値のあることである。世代間コミュニケーションは子供たちに「高齢者の尊重」や「人への思いやり」といった教育にも繋がると考察する。

少子高齢化により増加する高齢者が禁忌だけでなく、戦争体験や震災など自然災害体験を昔のようにもっと子供たちに教え、伝える役割を制度の枠組みに入れていけば、より安全でより幸せな社会な構築できるのではないか。そのためにも敬老会や戦争体験を語る会のような世代間コミュニケーションをもっと幼稚園から高校までの授業や日常で全地域で導入していく取り組みが。

⁴⁸ 老人を敬い、慰安する会。

参考文献

-
- ・ Jeremy Bentham, *The Theory of Legislation*, ed. C.K. Ogden, 1931
 - ・ 新谷尚紀『日本人の禁忌』青春出版社, 2003年12月
 - ・ 樋口清之『禁忌と日本人』講談社, 1982年12月
 - ・ 勝田至『死者たちの中世』吉川弘文館, 2003年5月
 - ・ 勝田至『日本葬制史』吉川弘文館, 2012年7月
 - ・ 養老孟司『死の壁』新潮社, 2004年4月
 - ・ 中尾文隆『柳田国男の民俗学がわかる本』秀和システム, 2007年3月
 - ・ 五味弘文『お化け屋敷になぜ人は並ぶのか』角川書店, 2012年6月
 - ・ 深田博己「恐怖情報と説得」北大路書房, 2002年
 - ・ 今井芳昭『依頼と説得の心理学』サイエンス社, 2006年9月
 - ・ 具志堅伸隆、唐沢かおり「怒りと恐怖がもたらす説得効果」社会心理研究、
第22巻第2号 2006年
 - ・ 野村純一『新潟県の昔話と語り手』新潟県教育委員会, 1979年
 - ・ 養老孟司、斉藤磐根『脳と墓Ⅰ』弘文堂, 1992年3月
 - ・ 野村純一『昔話伝承の研究（上）』清文堂出版, 2010年10月
 - ・ 野村純一『昔話伝承の研究（下）』清文堂出版, 2010年12月
 - ・ 野村純一『昔話の語りと語り手』清文堂出版, 2011年6月
 - ・ 内野久美子「タブーの社会学」哲学第63集
 - ・ 山根一郎「恐怖の現象心理学」人間関係学研究5項, 2007年
 - ・ 千葉公慈『知れば恐ろしい日本人の風習』河出書房新社, 2012年12月
 - ・ 前野隆司『「死ぬのが怖い」とはどういうことか』講談社, 2013年1月
-